

小学校英語授業における教師と児童のやり取りの分析 ～授業の談話記録からの考察～

A study and analysis of the interaction between
teachers and students in elementary school English classes

森本 敦子*・黒川 愛子**

Atsuko Morimoto

Aiko Kurokawa

The main objective of this study is to analyze the interaction in English lessons at a private elementary school. Students who are eight to nine years old in the 3rd grade take English lessons as a foreign language twice a week at Tezukayama Elementary School in Japan. Lessons focus on teaching four language skills including listening, speaking, reading and writing in their school English curriculum. Two native speakers, and a Japanese English teacher are in class with a homeroom teacher. Also, a homeroom teacher supports students' English learning during morning sessions selected by the Japanese English teacher.

In this research, teachers and students' interaction during the lesson is recorded, and analyzed in order to see the quality and quantity of utterances. The result of this research reflects that interaction related to reading skill was less in comparison to other skills, reflecting a need to improve students' reading skills in the future.

1. はじめに

1.1 研究の背景

文部科学省 (2017a) により、2020年度から、小学校において、第3、4学年対象の小学校「外国語活動」及び、第5、6学年対象の「外国語科」の全面実施 (以下、全面実施) が始まる。これらをいかに成功に導くかは、小学校英語教育のみならず、現在の日本の英語教育全体の重要課題である。文部科学省 (2013) では「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」として、小学校での英語教育の拡充強化、中・高等学校における英語教育の高度化など小・中・高等学校における英語教育の抜本的充実を掲げ、全面実施に向け、2014年度から2017年度にかけての4年間、「外国語教育強化地域拠点事業」を行なった。その研究指定を受けた小・中・高等学校は、小学校における先行実施、中・高等学校での英語教育の高度化、及び小・中・高等学校の連携に取り組んだ。筆者 (黒川) は上記研究指定 (以下、研究指定) を受けた京都府内国立大学附属中学校に勤務し、附属校教員らとともに研究指定に取り組み、その成果を泉・山川・黒川・津田 (2018)、黒川 (2018、2019a、2019b、2019c)、黒川・山川 (2019)、黒川・山川・泉 (2019) で述べた。

文部科学省 (2019) では公立小学校19,336校に行った「平成30年度英語教育実施調査」において、高学年において外国人指導助手 (以下、ALT) を活用した時数の割合が71.4%と増加傾向にあることを報告している。また、文部科学省 (2018) が前年度に公立小学校19,487校を対象に行った調査では、高学年で「外国語活動」を行っている割合は全体の91.9%、教科としての「外

* 帝塚山小学校 (Tezukayama Elementary School)

** 帝塚山大学 (Tezukayama University)

国語」を行っている割合は8.1%であることや、英語教育を担当する教員が学級担任である割合が全体の91.9%、専科教員等が担当する割合は全体の4.3%であることも報告している。帝塚山小学校（以下、帝塚山小）は、前述した英語教育改革が始まる以前から、小学校第1学年（以下、1年生）から日本人英語科専任教員（以下、JTE）及び帝塚山小英語科ネイティブ講師（以下、NET）が中心となって指導を行う英語教育を進めてきている。私学の特徴を含んで考えたとしても、帝塚山小が進んだ英語教育を行っていることは周知の事実と言えよう。筆者（森本）はその英語教育を先導してきており、その研究成果をアレン玉井ら（2013、2014）、泉・長沼・島崎・森本（2016）、長沼・幡井・森本・山川（2018）で述べている。

本研究は筆者らの上記の研究を活かした帝塚山小・帝塚山大学の連携研究の1つである。

1.2 小学校新学習指導要領における「話すこと」とは

文部科学省（2017a、p.173）では、小学校「外国語活動」において、これまでの「聞くこと」、「話すこと」の2技能2領域から、「話すこと」を「話すこと[やり取り]」、「話すこと[発表]」に分け、2技能3領域に、文部科学省（p.156）では小学校「外国語科」においても同様とし、「聞くこと」、「読むこと」「話すこと[やり取り]」、「話すこと[発表]」の4技能5領域と示している。表1に文部科学省（p.157、pp.173-174）が示す「話すこと」の2領域の内容を示す。

表1 文部科学省（2017a、p.157、pp.173-174）における「外国語活動」及び「外国語科」における「話すこと[やり取り]」と「話すこと[発表]」の目標（表は文部科学省をもとに筆者らが作成）

	「外国語活動」における目標	「外国語科」における目標
話すこと 「やり取り」	ア 基本的な表現を用いて挨拶、感謝、簡単な指示をしたり、それらに応じたりするようにする。	ア 基本的な表現を用いて指示、依頼をしたり、それらに応じたりすることができるようにする。
	イ 自分のことや身の回りの物について、動作を交えながら、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うようにする。	イ 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて伝え合うことができるようにする。
	ウ サポートを受けて、自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いて質問をしたり質問に答えたりするようにする。	ウ 自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いてその場で質問をしたり質問に答えたりして、伝え合うことができるようにする。
話すこと 「発表」	ア 身の回りの物について、人前で実物などを見せながら、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。	ア 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。
	イ 自分のことについて、人前で実物などを見せながら、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。	イ 自分のことについて、伝えようとする内容を整理した上で、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。
	ウ 日常生活に関する身近で簡単な事柄について、人前で実物などを見せながら、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すようにする。	ウ 身近で簡単な事柄について、伝えようとする内容を整理した上で、自分の考えや気持ちなどを、簡単な語句や基本的な表現を用いて話すことができるようにする。

1.3 研究の視点

帝塚山小では前述したとおり、児童はJTEとNETが中心となる英語授業を1年生から受け、学級担任（以下、HRT）が補佐的な役割を担っている。英語授業内で教師が発話する英語はすべて児童へのインプットとなる。複数指導体制においては、教師同士が行う英語のやり取りも同様である。それらをいかに理解可能なインプットにすることや、教師が児童への語り掛けを工夫し、児童が既習の語彙・言語材料を用いて発話しやすい状況を作るかのアウトプット活動での工

夫・支援が重要である。

文部科学省（2017b、p.84）では、主に児童同士がやり取りする活動として第6学年（以下、6年生）に位置付けられている「Small Talk」について、「児童が興味・関心のある身近な話題について、自分自身の考えや気持ちを楽しみながら伝え合う中で、既習表現を繰り返し使用する機会を保障し、その定着を図るために行うものである」とし、その主な目的は「(1) 既習表現を繰り返し使用できるようにしてその定着を図ること、(2) 話の続け方を指導すること、の2点である」としている。

筆者らは、これらの指導に向けても、授業内でいかなる対話のやり取りを進めるかが重要であると考えている。段階的には、「教師同士のやり取り」において様々な例を見せてのインプットを行い、次に「教師と児童とのやり取り」でインプットにアウトプットが加わり、最終的に「児童同士のやりとり」においてアウトプット活動が広がりを見せると捉えている。本研究に関わる広範囲の視点は「授業内で教師間、教師と児童間、児童間でいかなるやり取りが行われているか」を調べることである。帝塚山小の英語教育は4技能の統合的な習得に重きが置かれ、授業は学校独自作成のカリキュラムに従って計画・実施されている。しかしながら、実際に1回の授業で技能別にどれくらいの量の習得を目指して授業が進行されているかの検証は本研究が初めてである。本稿では筆者（森本）が行った、後述する授業1時間の談話記録の中で、特に「教師と児童のやり取り」に絞り、その全発話を、前述した4技能5領域の視点から分け、分析・考察を行う。なお、スピーキングについては、1.2で述べた「話すこと[やり取り]」に絞ることとする。

2. 先行研究

小学校英語授業における談話分析に関わる研究はまだ少ない。泉（2017）は優れた小学校英語授業を行っている教師の私立・公立小学校の低・中・高学年対象の10の英語授業において、授業中、教師発話が児童の方略的能力育成（以下、CS）にどのように寄与しているかを検証し、(1) 概して、授業中にCSを扱う場面（困った時の対応や分からない時の理解の進め方）はきわめて少ない、(2) Really? Good job. Well done.など、定型表現的な反応や評価等が多い、(3) 私立小学校でJTEとALTのインタラクションを中心に行う授業スタイルが見られ、CSが効果的に用いられている、という特徴が認められたと報告している。さらに泉は、児童の方略的能力を育成すると考えられる優れた授業の主な特徴として、(1) JTEがALT等に対して、新教材の導入や活動の説明などの場面で児童の理解を深めるために英語で聞き返したり、説明を求めたりする相互交渉ストラテジー（interactional strategies）を用いて、会話的調整が行われていること、(2) 英語で話す際に手や動作を伴う大げさなジェスチャーを用いて説明したり、絵や実物、ICTなどの視覚補助を活用すること、(3) 重要語句や表現はゆっくりはっきり繰り返し発話するなど、言語的調整が行われていること、(4) 児童の言葉が出ないときは単語の最初の音を発声するなど、音韻面で支援がなされていること、の4点を挙げている。

3. 本研究の目的

本研究の目的は、「小学校英語授業における教師と児童のやり取りを検証し、考察を行うこと」である。1で前述したとおり、「教師と児童のやり取りが、リスニング、スピーキング、リーディング、ライティングの4技能（以下、4技能）のいずれに関係したものであるか」を調べることを中心とする。

4. 研究の方法

4.1 参加者

参加者は帝塚山小（以下、本校）第3学年（以下3年生）の1学級39名である。

4.2 手続き

4.2.1 参加者が受けた1年生からの授業のシステム

以下に、参加者が1年生から3年生までで受けた授業のシステムを述べる。

参加者は、1学級内でまず名簿順でAグループとBグループに2分割され、週2時間の英語の授業を受けた。両グループは自教室と英語教室に分かれて授業を受けた。自教室ではNETが、英語教室ではNETとJTEによって英語で授業が進められ、日本語はほとんど使用されない。HRTは自教室における体調不良や英語が苦手な児童等のサポート的役割を主に担う。各授業者は同じ場所で両グループを対象に同じ授業計画で授業を進行し、自教室で行われる授業内容と英語教室で行われる授業内容は異なる。参加者は同じ週の2回の授業のうち、異なる場所で異なる教師から異なったスタイルの授業を受けるため、回は異なっても両グループが1週間に受ける学習内容や量はほぼ同じである。通常授業は上記の状況であるが、学期末や授業内容により、学級を2分割せず一斉授業を行う場合もあった。参加者は朝の会を利用したモジュール学習で、JTEが選択した教材を用いて、HRTとともに、英語の歌やお話の暗唱、カリキュラムに沿った語彙・表現を中心とした英語音読練習等も週3回行った。

4.2.2 参加者が1年生及び第2学年（以下、2年生）で受けた通常の指導

参加者が1年生及び2年生で受けた通常の授業は、本校が例年行っている指導である。本校では、基本的に全学年英語の授業が英語で行われ、1年生では、英語の授業に慣れ、英語での指示を理解する力を養うことが目標とされ、参加者は、授業内での教師と児童のやり取りに沿って学習を進めた。本校独自教材である『My English Book』を用いて、身の回りの生活に関連した英単語や表現を学習した。英語の歌、ゲーム、工作、絵本の読み聞かせ、発表活動、といった、参加者が楽しく学びながらスピーキング力、リスニング力を身に付けることを意図して用意された活動を数多く行った。

1年生の学習活動の目標は教員や友達の英語を聞いて理解することであるが、参加者は英語科教員が作成した独自教材『The ABC Book』を用いて、リーディング、ライティングに関わる学習も行った。ライティングは、アルファベットの最初の6文字の書き方の練習を行い、それらの文字から始まる英単語を3～5個程度書き写すことができるようになることが目標であった。

2年生では1年生よりも幅広いカテゴリーで英語を学ぶ。教師からの簡単な質問内容を理解し、簡単な英語で答える活動が増えた。ライティングに関しては学習する量が増え、年間で10文字分、1回の授業内で書く英単語の数も約5～10個と約2倍に増える。毎年12月に全学年が参加する英語発表会（以後、英語発表会）では、1年生では、参加者は学級全体でチャンツを行なったが、2年生ではグループごとに分かれ少人数でセリフを言う形式で、学級全体で英語劇を実演した。グループで発話するセリフも長く、ストーリー性のある内容を全員で発表した。

4.2.2 参加者が受けた3年生における日常の指導

参加者が3年生で受けた通常の授業も本校が例年行う指導である。3年生では1年生及び2年生での復習とまとめを行いつつ、参加者は第4学年以降の学習に向けて、学ぶ内容・学び方の移

行段階としての学習を行なった。1年生・2年生では、教師から楽しい英語の授業を受けるという受け身の立場であったが、3年生になると参加者自身が主体的に「英語を学ぶこと」を楽しむカリキュラム内容の中で学習が進められた。3年生から始まる「友達への英語インタビュー」、「英語クイズ」、「ゲーム的要素を取り入れた英語の歌」等に取り組み、2年生までの「教師と児童集団」・「教師と児童」のやり取りから、「児童と児童」・「児童と児童たち」のやり取りへと発展し、主体的・対話的な学びを進めた。ライティングにおいては、さらに10文字学習を進め、第3学年次ですべてのアルファベット学習を終え、文字を認識し、書けるようになることを目標に取り組んだ。

具体的なライティングを含む授業の流れの例として、表2に英語発表会までの学習過程を示す。

表2 英語発表会までの学習過程

(1) ライティング学習と連動させ、全アルファベットに対応する英単語を3～5個程度、各自が選択し、学級全体の「アルファベット順、英単語リスト」を決める。(例star, soccer, socks, shoes)
(2) 指導者が児童選択の単語をフレーズにまとめる。(例Soccer stars…Oh! Stinky socks and shoes!)
(3) アルファベットの各文字を担当する児童(2～4名)を決める。
(4) フレーズの意味を知り、発音練習をする。
(5) 各グループで意味に合う動き(寸劇)を考え、グループごとに発表の練習を行う。
(6) 学級全体のフレーズを全員で発音練習する。
(7) 各グループの寸劇を順に発表し、3年生全体で一つのアルファベットごとの英単語紹介パフォーマンスをする予行練習を行う。

4.2.3 本研究における談話記録を行った授業

本研究における談話記録を行った授業(以下、本授業)は、約6週間の練習後に行われた英語発表会後の最初の授業であり、クリスマス为主题に学習を行った。欧米圏で行われる重要な季節行事であるクリスマス为主题に児童が主体的に取り組みながら学習が進められるよう、授業計画が立てられた。クリスマスは子ども達にとって親しみがあり、楽しみにしている行事の一つであるが日本の風習と異なることも多く、本校では異文化理解教育として扱うことが多い。またChristmas、present、snowman、snowflakeなど、スペルが複雑で長い単語も多く登場するため、参加者は教師の英語を集中して聞き、その内容を理解しながら活動を進めることができるように計画された授業を受けた。本校NETがアメリカ人であるため、あえて異なる英語を聞く機会を設けるため、デジタル教材には、ブリティッシュカウンシル提供のイギリス英語で読まれる映像が用いられた。クリスマスが日本でもイベントとして浸透していることから、カタカナ発音をしてしまう参加者が多いと推測され、発音練習が丁寧に行われ、参加者が単数形・複数形の意味にも気付いていけるように、授業が展開された。ライティングに関しては、参加者が飽きることなく2学期のまとめを行なっていけるよう、学習した単語を『The ABC Book』に教師の発音を聞きながら書きこみ、参加者もスペルアウトする活動を行った。

表3に本授業の学習展開を示す。

表3 本授業の学習展開

段階	主な活動	教師の発話、(→)考えられる児童の反応・指導上の留意点
導入	1. あいさつ	How are you, today? → I'm fine. Thank you. What event do we have in December?
展開	2. クリスマスのデジタル絵本を読む	Let's watch a story of "The Snowman." What did you hear? → Snowman. Let's watch it again. (スクリーンを指し) What's that? ・発音指導、単・複数形に気付かせる
	3. お話に関するワークシートをする	Tell me about words for Christmas? → トナカイ、present ・指導者の発問に応えながら、皆で進める
	4. クリスマスの単語を自分の本に書きこむ	Let's write these words in your ABC book. What's the first letter of _____?
まとめ	5. 終わりのあいさつ	That's all for today. See you next week.

本授業は2017年12月中旬に行われ、指導体制はNET 2名とJTE 1名、参加者は39名である。授業開始と終了時の挨拶時は教師3名が黒板前に位置したが、活動内容により、中心となって発話する教師が教室前面中央に出て、その他の教師は机間巡視やデジタル教材の操作でPC前に位置した。デジタル・ビデオカメラを英語教室後方に設置し、デジタル・ボイスレコーダーが児童の目に触れぬよう封筒の中に入れて状態で教員の机の上に置かれた。ビデオ映像だけでははっきりしないかもしれない音声をデジタル・ボイスレコーダーで録音するためである。

4.2.4 談話記録の分析方法

3. で述べた本研究の目的を達成するため、1回の授業内の児童と教員のやりとりの全発話を4技能に分け、分析を行った。談話記録は、授業の開始時から終了時までをすべて収録し、録音内容を授業後に聞き、すべてを書き起こした。デジタル絵本のリスニング教材に含まれる音声や参加者の個人的な小さな声でのつぶやきは分析には入れなかった。談話分析の対象は、教師から参加者への発話、参加者から教師への発話、参加者間の発話である。1つの発話には複数の技能習得が関連している可能性があり、特に参加者の発話には複数の技能が関連していることが多いと考えられる。参加者自らが教師に向けて発話した場合も、教師の発話を受けて発話した場合も、参加者の発話については、その発話に最も大きく関連していると判断した技能を1つ選ぶこととした。

表4に技能別の分け方の観点を、表5には技能別の分け方の観点を示す。

表4 参加者と教師のやり取りにおける発話の技能別の分け方の観点

教師の発話	その発話が参加者のどの技能が高まることをねらいとして発話されているか。
参加者の発話	その発話が参加者のどの技能が身に付いていたから発話できたと考えられるか。 その発話が教師の意図を受け、参加者のどの技能を高めながら発話されていると考えられるか。

表5 技能別の分け方の観点

技能別	分け方の観点
リスニング	聞き取った話のリスニング・クイズ、課題の説明、指示文など
スピーキング	授業開始・終了時の挨拶、学習課題や内容に関する質問・応答、教員からのコメントなど
リーディング	ワークシートに書かれている英単語を読む活動、デジタル絵本のスクリプトを読む活動に関する会話、書かれたスペルを読み上げるのみの活動など
ライティング	書かれたスペルを教員または児童が読み、文字認識を行いさらに書く、など書く活動にまで到達した会話

表6に具体的にどのような発話をどの技能の習得に関連していると判断して分けたかの例を示す。

表6に示す観点から、全発話と各技能別に分け、技能別の発話数の、全発話数に対する割合(%)、つまり、1技能の発話数÷発話総数×100(少数第3位を切り捨て)で計算することとした。

表6 発話内容の技能分類例

技能	発話例
リスニング	We want to talk about Christmas. Please look at this. / Listen carefully.
スピーキング	What day is today? It's Tuesday. / Do you understand this? / That's right.
リーディング	Oh, this is easy. What's next? Hat. Very nice. And the next one...
ライティング	Be careful when you write Christmas...C...you have to write it with a big letter. / How do you spell cake?

5. 結果

分析対象となった発話総数は445文である。

技能別の発話数とその割合を表7と図1に示す。小数第2位までとしたため、表7、図1ともに合計が100%を超えている。

表7 分析対象となった全発話数に占める技能別発話数の割合

技能	発話文数	全体に占める割合(%)
リスニング	177	39.78
スピーキング	158	35.51
リーディング	39	8.76
ライティング	71	16.00
4技能の合計	445	100.05

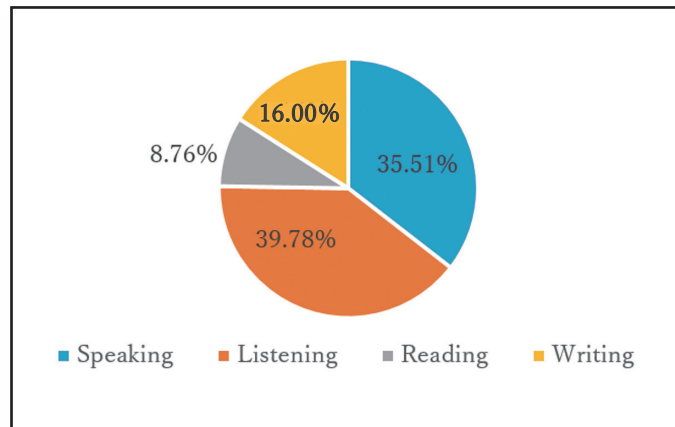


図1 本時の分析対象発話全体に占める各技能の割合

6. 考察

6.1 授業者の考察

技能別の発話の割合では、リーディングの割合が8.76%と低く、ライティングの16.00%の半分程度である。その理由として、デジタル絵本教材をリスニング力強化のための活動（お話を聞いた後、聞こえた単語を発表する）に使用し、「読むこと」の活動がデジタル音声を聞いて反復することにとどまり、その反復を今回は発話数として含めなかったことが挙げられる。配布したハンドアウトは単語を中心に扱ったものであったが、今後はデジタル絵本の原稿を利用したワークシートを作成する等、「読むこと」の活動に取り組む時間を意図的に増やしていく必要があると考える。談話記録からは、活発に単語をスペルアウトし積極的に学習に取り組む参加者の姿を観察することができた。今後は、これまでの単語や簡単な英文を書く活動に加え、より「読むこと」の活動に着目した課題（短いお話の暗唱、詩の音読など）を組み入れる等、カリキュラム改訂への課題も見出すことができた。デジタル教材の場合、一定の基準で教材は提供されるが、それを変更することが難しいということも授業計画の際に配慮する必要がある。デジタル絵本教材によっては、映像と音声を適宜一時停止できるものと出来ないものがあり、教師が児童の状態に合わせて英文を読む活動とでは、その活用メリットが異なる。その授業内容や目的に合わせて、適切に活用を進めながら、今後、児童の4技能5領域を、よりバランス良く育成していく実践のさらなる探究を行いたい。

6.2 共同研究者の考察

6.2.1 リスニング力に関わる結果に対する考察

本来は教師と児童のすべてのやりとりにリスニング力が関連する。教師は児童が聴き取ることができることを意図して発話を行うが、児童が教師とやりとりを行うためには、まず、教師の発話内容を理解しなければならない。リスニング力の習得に関連した発話が約4割であった結果は、教師がインプットの重要性を認識し、参加者が理解できるよう、ゆっくり目に発話する、繰り返して発話する、強調したい語は大きめの声で発話する等の工夫を行っている成果であり、教師の発話を参加者が理解して発話している結果であると考えられる。

6.2.2 スピーキング力に関わる結果に対する考察

教師の発話内容が理解でき、それに対してどんな英語を用いて発話するかを習得していなけれ

ば、参加者は発話ができない。スピーキング力の習得に関わる発話の割合がリスニング、リーディングに次いで4割近かったことは、日頃の授業において、参加者が誤りをためらわず楽しくアウトプットする活動の工夫の積み重ねの成果であると推察する。

6.2.3 リーディング力に関わる結果に対する考察

全面実施における「読むこと」の指導は第5学年（以下、5年生）から始まる。3年生でリーディング力の習得に関わる発話リスニング力と同値の約4割である結果は、参加者の「文字を見て発音する」、「英単語を見て発音する」、「英文を見て音読できる」力が伸びている成果であると考えられる。

6.2.4 ライティング力に関わる結果に対する考察

「書くこと」の指導についても全面実施では5年生から始まる。3年生段階で、その割合が「約9%しかないではなく、9%もある」と捉えることが自然であろう。本校での音声を伴った段階的なライティング指導や、英語発表会の取組が示す児童が仲間と楽しんで行う活動の成果であると推察する。

7. 結論

結論として、以下のことが言えよう。

- (1) 教師と参加者のやり取りの中で、リスニング力・リーディング力の習得に関わる発話の割合が同値で全体の8割を占め、インプットを工夫した英語授業の成果を示していると考えられる。
- (2) スピーキング力習得に関わる発話の割合も4割近くを占め、楽しく活発なアウトプット活動の成果と考えられる。
- (3) ライティング力習得に関連した発話が3年生段階で1割近くあり、1年生から段階的に少しずつ楽しく学んできた本校英語授業の成果であると考えられる。

8. 今後の課題

今後の課題として、以下の2点が挙げられる。

- (1) 児童の発話には児童の情緒的な側面も影響していると推測できる。今後、児童の教室内発話の情緒的な側面も探究していく必要がある。
- (2) 談話記録のより詳細な分析検証を行ない、より良い小学校英語授業の探究を続ける必要がある。

本研究が、全面実施に向けての小学校「外国語活動」・「外国語科」の授業内容の向上に向けての1提案となれば幸いである。

引用文献：

- アレン玉井光江・泉恵美子・大田亜紀・島崎貴代・田縁眞弓・長沼君主・森本敦子・萬谷隆一（2013）.「外国語活動の評価方法に関する研究—発達段階を意識した評価のあり方—」*JES Journal*, 13, 212-226.
- アレン玉井光江・泉恵美子・大田亜紀・島崎貴代・田縁眞弓・長沼君主・森本敦子・萬谷隆一（2014）.「小学校外国語活動における評価のあり方—児童の学びの支援に関する研究—」*JES Journal*, 14, 228-243.
- 泉恵美子（2017）.「小学校英語における児童の方略的能力育成を目指した指導」『京都教育大学教育実践研究紀要』, 17, 23-33.京都教育大学

- 泉恵美子・長沼君主・島崎貴代・森本敦子 (2016).「英語学習者の自己効力と自律性を促進する授業設計と評価—Hi, friends! Can-Doリスト試案に基づいて—」*JES Journal*, 16, 50-65
- 泉恵美子・山川拓・黒川愛子・津田優子 (2018).「思考力・表現力を育成するパフォーマンス課題と評価—小中の英語教育における取組—」『京都教育大学教育実践研究紀要』, 18, 213-222. 京都教育大学
- 黒川愛子 (2018).「日本人中学生のスピーキング力育成に対するTPRとラウンド制指導法の有効性に関する実証研究—中学1年生段階での活用—」第23回関西英語教育学会研究大会口頭発表資料.
- 黒川愛子 (2019a).「中学校英語教育の視点からの小学校・中学校段階での思考・判断・表現に関わる考察—スムーズな小中接続に向けて—」.『2018年度～2021年度科学研究費補助金基盤研究(B)研究成果中間報告書I』, 80-87
- 黒川愛子 (2019b).「日本人中学生のスピーキング力育成に対するラウンド制指導法の有効性に関する実証研究—中学2年生段階での活用—」『LET関西支部研究集録』, 17, 31-55.
- 黒川愛子 (2019c).「日本人中学2年生・3年生のスピーキング力育成に対する「ラウンド制指導法」の効果に関する実証研究—スムーズな小中接続に向けて—」Fleat VII.口頭発表資料
- 黒川愛子・山川拓 (2019).「スムーズな小中接続に向けてのパフォーマンス課題と評価の取組～思考力・判断力・表現力の育成のために～」『第19回小学校英語教育学会北海道大会要項集』, 128.
- 黒川愛子・山川拓・泉恵美子 (2019)「小学校『外国語活動』・『外国語科』の授業が中学校入学時の聴解力に及ぼす影響」『全国英語教育学会第45回弘前研究大会発表予稿集』, 200-201.
- 長沼君主・幡井理恵・森本敦子・山川拓 (2018).「小学校英語でのパフォーマンス評価におけるCan-Do評価の用い方に関する一考察」『日本児童英語教育学会 (JASTEC) 紀要』, 37, 187-204
- ブリティッシュカウンシル (2017). “The Snowman”
<https://learnenglishkids.britishcouncil.org/short-stories/the-snowman>
- ブリティッシュカウンシル (2017). “The Snowman activity sheet”
<https://learnenglishkids.britishcouncil.org/sites/kids/files/attachment/short-stories-the-snowman-worksheet.pdf>
- 文部科学省 (2013).「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」.
http://www.mext.go.jp/.../afiledfile/2014/01/31/1343704_01.pdf
- 文部科学省 (2017a).『小学校学習指導要領 (平成29年告示)』. 文部科学省.
- 文部科学省 (2017b).『小学校学習指導要領 (平成29年告示) 解説外国語活動・外国語科編』. 文部科学省.
- 文部科学省 (2017c).「外国語教育の抜本的強化のイメージ」.
http://www.mext.go.jp_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/_icsFiles/afiledfile/2017/11/24/1398488_6.pdf
- 文部科学省 (2018).「平成29年度英語教育実施状況調査 (小学校)」.
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiledfile/2018/04/06/1403469_04.pdf
- 文部科学省 (2019)「平成30年度英語教育実施状況調査 (小学校)」.
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afiledfile/2019/04/17/1415043_02_1.pdf